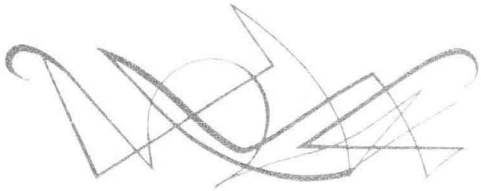

日本現代文學全集・講談社版 71

宇野千代 岡本かの子 集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

日本現代文學全集
71
宇野千代・岡本かの子集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和41年2月10日　印刷
昭和41年2月19日　發行

定價　500圓

© KŌDANSHA 1966

著者　宇野千代（うのちよ）
岡本かの子（おかもと）

發行者　野間省一

印刷者　北島織衞

發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話東京（942）1111（大代表）
振替東京3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製本　和田製本株式會社
製函　株式會社岡山紙器所
株式會社第一紙藝社
背皮　厚川株式會社
表紙クロス　日本クロス工業株式會社
口繪用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

宇野千代集　目次

巻頭寫眞

筆蹟

色ざんげ……七

人形師天狗屋久吉……八九

おはん……一〇八

行く……一四一

私の青春物語　抄……一四三

作品解説……龜井勝一郎　三八四

宇野千代入門……淺見淵　三九〇

年譜……三九八

參考文獻……四一一

岡本かの子集　目次

巻頭寫眞

筆蹟

雪……一五一
茶屋知らず物語……一五五
とと屋禪譚……一五七
健康三題……一六三
食魔……一六五
渾沌未分……一八八
花は勁し……二〇〇
金魚撩亂……二一三
快走……二三五
東海道五十三次……二三九
老妓抄……二四九
丸の内草話……二六〇
鮨……三一五
家靈……三三五
河明り……三三一
雛妓……三六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作品解説……龜井勝一郎　三六
岡本かの子入門……淺見　淵　三九四
年　譜……四〇四
参考文獻……四一三

宇野千代集

アランの言葉

世にも幸福な人間とは
やりかけた仕事に
基いてのみ
考へを進めて行く
人間のことであらう。

宇野千代

色ざんげ

○

どこから話したら好いかな、と暫く考へてから彼はゆつくりと語りはじめた。外國から歸つて間もなく蒲田に二階二間階下三間くらゐの小さな家を借りて、僕は二階、女房と子供は階下とまるで別々の生活を始めた。もうその頃は別れ話もだいぶん進行してゐてただ具體的な問題の片附くのを待つてゐるといふだけだつた。何しろ僕は十年振りに見る日本の女がきれいできれいで眼がさめると家を飛びだし街をほつき歩いたり夜はおそくまでダンスホールやカフェーを漁り歩いたりして歸つて來るといふ風で幾日も女房の顏を見ないことの方が多かつた。或る夜のこと歸つて見ると机の上に女文字の手紙が一通のせてある。高尾と署名してあるから高尾何子とでもいふ女だらうと思つてあけて見るとさうではなくて中には小牧高尾とちやんと書いてある。いかにも高尾といふやうな男名前に適はしい女の書いた手紙らしく達者な筆つきで二枚ほどの用箋に何か譯の分らぬ詩のやうなものの書いてある後に、自分の家は千駄ケ谷の德川さんの邸の近くだからぜひ一度遊びに來て呉れと書いてある。戀文といふにはひどくあつさりした抽象的な戀文だし、僕はそのまま讀み捨てて眠つて了つたのだが、その翌日も歸つて見ると同じやうな手紙が机の上にのせてあつて、今度は詩のあとに返事がほしいと書いてある。翌日もその翌日も同じやうな封筒がのせてあつたが、僕はもう披いて見る氣もなくそのままにしておいた。そして一週間くらゐも根氣よく手紙が續いてから或るときのこと、それまでの細長い封筒ではなくちよつと大型な西洋封筒に變つてゐるのを見て何氣なく披いて見ると、手紙のほかにその女のだといふ若い女の寫眞が一枚入れてあつたが、女の背後には虎の皮の擴げてある椅子やピアノなども見えてなかなか中產階級的な長閑さだ。翌朝出がけに僕はそれを女房に見せて遣つた。「あら、お金持のお家らしいぢやあないの、あなたもう逢つてるんでしよ?」「冗談言ふな、向うから手紙を寄越したりする女に逢ふものかい。」「だけどちよつとくらゐ遊んで遣つたつて好いぢやあないの、きつとお金持よ。」女房はなかなか洒落れた口を利くが、寫眞の女はちやうどそれくらゐしか美しくなかつたのだ。そんなことがあつてから後も相變らず手紙は來る。別に氣にとめてゐるとも思はなかつたのに僕は半分その女の根氣のよさに呆れながら、ダンスホールでもカフェーでも女を摑へては訊いて見た。「君たちの中に小牧高尾つて言ふ女ゐる?」そんなことで僕も相當に手紙の女のことを氣にするやうになつてゐたのかも知れぬ。或る夜のこと家に歸つて來て、机の側にちやうどもう五寸くらゐの高さに積重ねてあるその手紙の中から出鱈目に一つ拔きとつて封をきつて見るともうそれには詩などは書いてなく、明日の夕方六時から六時半までのあひだ、千駄ケ谷の驛の改札口で待つてゐるから來て呉れ、わたしは髮に紅い造花の薔薇の花を挿してゐる、とただそれだけの文面が三行ほどに書いてある。勿論僕は行きはしなかつたのだが、一體その次の日の手紙には何と書いてあるだらうと思ひながら次の日附のを披いて見ると、一字一句前のと同じ文句でわたしは髮に紅い造花の薔薇の花を挿してゐる、と書いてある。僕はちよつと面白くなつて今度はその前の日附のをあけて見るとやはり造花の薔薇の花をと書いてあつて、次のも次のもちやうどその晩屆いたのも合せて十二三通ほどの手紙がみんな同じものなのには呆れて了つた。僕はそれでもつと以前のに遡つて最初の二三通

のところまでみんな封をきつて見る氣になつた。すると薔薇の花の前は凡そ七八通ばかりはどれにもあの虎の皮の上に腰をかけた寫眞が入れてあつて、それ以前のには譯の分らぬ詩が續いてゐる。僕はしばらくその夥しい文反古の中に坐つてゐる間にその女に對して異常な興味を感じはじめてゐる自分に氣がついた。明日の夕方は行つてやらうとそのときさう思ひついた。

翌くる日の夕方、千駄ケ谷の驛へ下りたのは六時二十分すぎくらゐであつた。フォームの階段を半分も下りたと思ふと、そこの改札口のところに背丈のたつぷりした若い女が眞直ぐにこつちを向いて立つてゐるのが見える。この頃よく雜誌などの寫眞で見るフェリシタ夫人のしてゐるやうな工合に、長い髪の毛を編んでゆるく額の上に捲きつけそれに紅い造花の薔薇の花を挿してゐるのが、ちやうど夏の日のことだから六時すぎと言つてもまだ晝のやうで外苑の方の明るい廣場を背景にして却つて顏ははつきり分らぬけれども氣のせゐか寫眞よりも若くいきいきした女のやうに思はれる。側まで來ると、女はきらりと光るやうな眼をあげてまともに僕の顏を見た。僕はわざとゆつくりした足どりでそのまま廣場を左手へ人力車の溜りの横を馬道に沿うて曲つて行つたが、何となく背後から迫つて來るやうなその女の眼が感じられる。こんなときはなかなか「あなたは小牧さんですね、」などと言へるものではないと見える。僕は女の眼の屆かぬところまで歩いて行つてからちよつと立留つた。そしてそこの並木の繁みを透して驛の方を振返ると、女はまたもとの姿勢に戻つて後向きに立つてゐる。やはり僕とは氣づかなかつたのかなと僕はさう思ひながら暫くそこに立つて見てゐると、軈てくるりと向きをかへて眞直ぐに德川さんの邸の方へ歩き出した。多分きつかりと六時三十分になつたからなのだらうと思ふが、いかにも機械的な動作で未練げもなくさつさと引上げて了ふのだ。僕はしばらく間をおいてから女のあとをつけた。驛から一町くらゐのところを右に折れた角邸の德川さんの家よりももつと嚴しい石門のある中へ消えて行く。門札には「小牧與四郎」と出してあつて、古びた薔薇の植込がとんねるのやうになつて奥庭に續いてゐる。女の草履の音がまだその奥で聽えるやうなのを僕はちよつと度膽を拔かれたやうな氣持でそこに立つて耳をすましてゐたが、やがて八幡社の方の通りに近いところに一軒の米屋を見出してその親爺に訊いて見ると、そこは小牧與四郎と言ふ三菱の重役の家で、主人の與四郎は中國や臺灣などに旅行してゐることが多く、留守中はこの間まで華族女學校に行つてゐた一人娘のお孃さんがゐるきりだとそんなことまで話して呉れた。そのお孃さんといふのがあの女なのだらうかと僕は何となく獵奇的な興味に驅られながら、しかしさつき改札口のところでちらりと見た女の大柄な嚴つい體つきや僕の方を見たときの光るやうな眼つきなどを思ひ合して戀を感じると言ふのには少しの感傷も柔かさもない女のやうな氣がしたが、それにしてもこの頃のやうに夜となく晝となくカフェーダンス場などに入りびたつてそんなところの女たちとばかり遊んでゐる僕にとつては何か新鮮で風變りな相手のやうに思はれた。その日はそのまま、もう街へも遊びに廻らずに家へ歸つて來るとやはり机の上には紅い薔薇の花をといふ手紙が置いてある。そこで翌くる日は少し早目に家を出て床屋に行き途中で靴を磨かせたりして千駄ケ谷のプラットフォームに降りると、女は昨日と同じところに同じ姿勢で眞直ぐに立つてゐる。僕の姿を認めたと思ふと一種の確信のある足どりでつかつかと近づいた。「湯淺さんでせう？　やつぱり湯淺さんですわね、」さうだと答へると、「あなた昨日もここへいらしたでせう？」と言ふ。何だか正直に答へたくなかつたので、いや、いまここへ來たのが始めてだと言つた。「そんなことないわ、でもあんなに急いで行つてお了ひになつたからひよつと違つた方かと思つたけど、」「ぢやああなたは毎日ここで待つてゐたんですか？」「ええさうよ。だつてあなたはきつといらつしやるに極つてるんですもの、」女はさきに立つて歩き出した。僕はそのあとを追ひ乍ら女のよく發育した手足や血色の好い頰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を見た。「どういふ譯であんなに毎日手紙を寄越したんです?」「そんなこと訊くもんぢやないわ。もしあなたが來なかつたらこれからさき三年でも三年でも續けて出す積りだつたの、何でも思つてることを途中で止したことなんかないのよ、あたし、」女は昨日の石の門の前で僕を振返つた。「ちよつと寄つてらつしやらない?」僕は女の後から薔薇の繁みのとんねるを潜つて裏庭の方にある離れの洋館へ上つて行つた。部屋の中はもう少し暗かつた。女は低いスタンドの紐をひいた。するとその仄かな明りの中にあの寫眞にあつたピアノや虎の皮のかけてある椅子が見え、それから壁にピンで留めてある新聞からの切抜きらしい僕の寫眞なども見える。「お酒のむでせう?」女は僕に何かの洋酒をすすめた。間近に見る女の顏は女といふよりもまるで子供のやうな稚げな表情をもつて、その子供らしさのために恐れを知らぬといふ風に見える。「どうして僕に逢ひたいなどと思ひついたのです?」「まだそれを訊きたいの?」女はちよつと笑つた。「あなたが好きだからよ。あたしあなたを愛してるの、」「愛してる、」僕は笑つた。「愛してるつてあなたはこれまでに戀愛なんかしたことあるの?」「あるわ。あたし一とう最初はうちの家庭教師を愛してたのよ。でも直きにそんなことをしてるのが馬鹿らしくなつたの。馬鹿らしいと思つたらその日に、自分であたしその男を馘にしたわ。」さつきからもうだいぶん時間が經つけれども誰もこの部屋に來るものはないし、母屋の方からも物音が聽えない。「ぢやあどうして僕のことを好きだと思つたの?」「あなたに汽車で逢つたからよ、」みんな話して了ふわと言つて女の語り出したところによると、彼女は僕が日本へ着いた日に神戸から東京まで乘つた汽車の中で僕と一緒になつた。臺灣から歸つて來るその父を大阪で待合せてやがて食堂車で少しやすんだりして座席に戻つて來ると、すぐあとからやつて來た僕が彼女の食堂車に置き忘れて來た扇をこれはあなたのでせうと言つてその父に渡したのだと言ふ。さう聽けばそのときのことを思ひ出すやうだけれども、彼女だつたのだらうかと思はれるその少女は紺色の水兵服か何かを着て絕えずうつむいて編物をしてゐたやうだつたので僕にはまるで覺えがなく、却つてその側に坐つてゐた白髮の老紳士の脂ぎつた額や鋭い眼ざしの中に彼女のそれに似通つたものがあつたかと思はれる。その夜汽車が東京驛に着いて家族や友達などに迎へられ新聞社の寫眞班に圍まれてゐる僕を見てあれは何者であらうかと翌朝の新聞をたのしみに披いて見て僕が外國にながい間ゐた湯淺讓二といふ洋畫家で蒲田の留守宅に落着いたと言ふことを知つたけれども、しかし家に父の留つてゐる間は何をすることも出來ない。「あたしとても上手に二人の人間になれるのよ。パパのゐる間はそれはおとなしいお嬢さん、パパがゐなくなると手のつけられない不良少女になつちまふの、」いつでも兩側に女中が一人づつついてゐて自動車の窓から外へ眼をやることも禁じられてゐるやうなお嬢さんもやるのだけれども、不良少女の役の方がもつと上手にやれる。早くまた父が臺灣へ行つて了へば好いとそれでも二十日くらゐも待つたのち、やつと或る日のこと父を東京驛へ送り出して了ふとその足ですぐに蒲田の警察署へ行つて僕の新しい住所と家族とについて調べて貰つてから、人力車に乘つて僕の家の前まで行つて見た。もう少しで這入らうと思つたけれども思ひ直して引返し、それからは毎日のやうにあの手紙を書いたのだと言ふ。「ぢやあ僕におくさんや子供のあることも知つてるんですね?」「そんなこと」と女はそのうすい唇を反すやうにして言つた。「そんなことはだつてあなたのことぢやないの、何でもありやしないわ。どんなおくさんだか知らないけど、でもそんなおくさんなんかよりあたしの方が好いにきまつてるわ、」「どうしてきまつてるんです?」「きまつてるわ、」獨り言のやうに繰返してからちらりと眼をあげて僕を見た。「あなたみたいなひとがあんなお家にゐて畫を描いてゐるなんて、」さう言つてちよつとの間口を噤んでゐる女の横顏を見てゐる中に彼女の言はうとしてゐることが僕には判るやうな氣がした。この華族女學校のお嬢さんはいくらか僕の

暮し向きについて僕を憐んでゐるらしく、さうでなければ案じてゐるらしい。僕はちよつと、小さな子供にをぢさんは馬鹿だねと言はれたときくらゐに機嫌を惡くした。その機嫌の惡さを隱さうとするためのやうに僕はそつと女の手をとつた。「駄目よ、觸つちや駄目、」とび上るやうにして女は部屋の隅の方へ體をにじらせてから、そこからぢつと眼をすゑて僕の方を見た。僕はしかし女を追つては行かなかつた。やがてあんまりおそくなるからと言つてそこを出ると、女もつづいて驛まで送つて來た。「また明日ね、」女は別れるときにさう言つた。

翌日になるとしかし僕はもう出掛けて行く氣がなくなつてゐた。戀をする相手といふにはあんまり衞生的な體つきと率直な性格とをもつてゐる彼女はほんの少しの感傷しか僕の心に殘さなかつたやうなのだ。それにほんたうのことを言ふと僕にはまだいくらかあの「面喰ひ」の氣持が殘つてゐて、さう美人といふほどではない彼女をむきになつて追ひ求めようとはしなかつた。その中にだんだんと日が經つて僕は自分の仕事の一つである秋の展覽會に出品するための制作が忙しくなつて來る。「こんなに情熱に燃えてゐる女をそのままにしておくなんて罪惡だ。」と書いたり、「逢ひに來てくれなければ何をするか分らぬ。」と書いたりした女の手紙が相變らず毎日のやうに來てゐたが、或る夕方僕は珍しく自分の家の二階で聲樂家の龜井雄二郎や畫家の園田修吉などと一緒になつて女房の給仕をうけながらビールをのんでゐると階下で誰かを呼んでゐるやうな子供の聲が聽える。すぐ降りて行つた女房が階段のところから僕を呼んだ。「あの女よ、あの女があなたを呼んでくれつて言つてるのよ。」近所の八百屋の門さきまで來てそこの子供を呼び出しの使ひに寄越したのだと言ひながら、さう言つてゐる女房の白粉をつけた白い顏は固く硬つたやうな表情になつてゐる。いつだつたか寫眞を見たときには、ちよつとくらゐ遊んでやつたつて好いぢやないのなどと利いた風なことを言つてゐた癖に、と思ひ乍ら僕はまた何か言つたりするのが面倒だつたので大きな聲をして言つた。「構ふことはないぢやないか、誰を待つてゐようと待つのは向うの勝手ぢやないか、」「だつて圖々しいつたらないんですもの。さんざんへんな手紙をよこしといて、今度は呼び出しに來るなんて、」「どうしたんです？」音樂家の龜井が鹿爪らしい顏をして訊くと、女房はそのままそこへべたりと坐つて、さも憎さげな調子をもつて客に女のことを話した。「しかし君、そんなのをいつまでも放つとくのは不可ないよ。興味がないんならないつてはつきり君の口から斷つてやるのがほんたうだよ。」「斷つたつて同じなんだよ。」やがて三十分もたつと思ふと今度は表から近所の俥屋の親爺がやつて來て、ちよつとそこまで僕に來てくれと言ふ。あとで行くからとさう言つて俥屋を歸してやると、龜井は眞顏で僕の方へ向いた。「あんなところで待たしとくなんて不可ないよ。おくさんも僕らもかうして坐つてるんだからその前ではつきり言つてやつたら好いぢやないか。さうし給へ、」眞面目な氣持といふよりは見物人のおせつかいな氣持からであらうと思ふが龜井は自分で俥屋の前に待つてゐると言ふ女を呼びに起つて行つた。間もなく龜井と一緒に女がやつて來た。僕らの晩餐は何だか會議でもひらいてゐるやうに固くなる。その中でも女房は一番遠くの方から明らかに敵意を見せた構へをもつて女の顏を見詰めてゐる。「いまも話したのですが、」龜井はさう女に言つた。「あなたのやうな若いお嬢さんが湯淺君のやうな男に夢中になるといふのはどうですかな、」「どういふ意味ですの？」女は詰問するやうに龜井の顏を見た。「いや、どういふ意味と言つてしかし、湯淺君にはおくさんもあるし子供もあるじ、」「知つてますわそんなこと。でもそんなことはあたしに何にも關係のないことですもの。」「まあ、何ですつて、」女房はかつとなつたやうな聲を立てて言つた。「まあおくさん、僕に任せといて下さい。ねえ小牧さん、僕の言つてることはたいへん常識的なことかも知れませんが、どうせ駄目なことにきまつてるのに」「きまつてなんかゐないわ。」いまの彼女にとつてどう

することも出來ないのは僕を好きだといふ彼女の氣持だけだ。さう言つてゐる女の樣子は、側に僕の女房のゐることなど猫の仔のゐるほどにも思はぬらしい。龜井は「ふうむ」と呻るやうな聲を立てた。さういふ有樣の龜井もそれから女房も何だかそはそはと狼狽てゐて、この席で落着いてゐるのは彼女ひとりのやうにも見える。「失禮ですが、今夜は僕がお宅までお送りしませう。決して惡いやうにはしませんから、」やがて龜井はそんなことを言つて女をつれて出て行つた。そのひよろひよろと高い後姿が隣りの生垣の向うに消えるのを二階の手摺によりかかつて見送つてゐた女房は、いらいらして言つた。「何て甘い男ばかり揃つてるんでせう。」

翌日ひる過ぎにまた龜井がやつて來た。「君は馬鹿だよ。」僕の顏を見るとすぐにさう言つて「小牧與四郎と言ふのは君あの有名な三菱の小牧與四郎なんだぜ。こんな幸運をみすみす逃がして了ふなんて馬鹿だよ。それにあのお孃さんはちよつと好いぢやないか、あんなにはつきりしてる女の子つてないぜ、」「はつきりし過ぎてて、氣違ひなんだよ、」「しかしあの氣違ひぶりは面白いぢやないか。ちよつと下賤な女の子の持つてない味だぜ、」龜井は無暗に感心して見せてからちよつと聲を落して、實はゆうべ一緒に家まで送つてゆく途中で今日君を女の家まで連れて行く約束をして了つた。惡いやうにはしないから是非俺の顏を立てろと言ふ。「がみがみ言ふな、行つてやるよ。」いつの間にか龜井の仲人口にのつて見る氣になつた僕は日の暮れるのを待つて一緒に家を出た。女の家の前まで來ると龜井はさきに立つて表玄關から案内を乞うた。古風な裝飾をした廣い應接間で暫く待つてゐると軈て扉があいていつものやうにこりともしない顏のまま小牧高尾が現れた。「龜井さん、もうあなたのご用はこれですんでよ、」這入るといきなり僕の方も見ないで龜井に言ふ。そこへ女中がアイスクリームか何か運んで來たので龜井は急いでそれをとつた。「しかしこれをたべる間くらゐここにゐたつて好いでせう。」龜井はいつの間にか彼女に對してとることにきめてゐたらしい道化者の態度をもつてさう言ひ乍らそこそこに僕を殘して辭し去つた。ちよつとの間だまつてゐた女は、これからちよつとそこまで一緒につきあつてくれないかと言ふ。銀座へ出て茶でも喫まうかと僕も思つたので出かけようと答へると、そこへ女中がまた茶菓を運んで來た。「さつきのこと、よくつて？」女はそんなことを訊く。「はい、お車ももう參つてをりますけど、」裏木戸をあけたところに一臺の大型な自動車が待つてゐた。僕は女と列んで腰を下しながら、「ママは？」と訊いて見た。龜井の話によると彼女の母はその父のゐない間この留守宅に殘つてゐる筈だといふのに、と思ひ乍らしかし僕はそんなことなぞ少しも氣にしてはゐなかつたのだけれども、女はちらりと冷い眼をして僕の方を見た。「ママにはママの娯しみがあるわよ、」あとで分つたことであるが、この高慢な不良少女のお手本はみなその母の行動によつたものであるらしく、僕はその夜、三十二にもなつた男である僕がこの十八の少女にホテルへ連れ込まれたのであつたが、そのホテルといふのは彼女の母の用ひ馴れてゐた戀の宿であつたらしく、さきがた女中に念を押してゐたこともその用意のことであつたのだ。自動車は暗い街を走り過ぎる。ぽつりと窓に雨滴が落ちたと思ふと、ざあと音を立ててすさまじい雨になつた。僕はそれとなくその雨の中を掠める灯りによつていまどこを走つてゐるところなのか知らうと思つたが、十年前の東京の街に對する僕のおぼろげな記憶は忽ち豪雨の中にもみ消されて了つて方角さへ分らない。僕はしかし女にもまた運轉手にも一體どこへ行くところなのかなどと訊かうとは思はなかつた。どこへでも行くところへ行つてやらうとそんな興味もあつて、僕は女の何となくものものしい感じでおしだまつてゐる有樣を滑稽なものに思つたのだ。やがて車がとまると暗い木立の奥から白い服を着た男が走つて來て女に傘をさしかけた。そこはホテルなのだ。僕はまだ或ひはそこで夕飯を喰べようと言ふのであらうかとそんな風に思つたのであつたが、女は落着いたものごしでボーイたちの慇懃な目禮

の中をロビーを抜けて暗い廊下の方へゆつくりと歩いて行く、すると背後から一人のボーイが追ひかけて來て女の手に部屋の鍵を渡すのだ。女はとある部屋の扉をあけた。すぐあとから僕が續いて這入るとがちやりと扉に鍵をかけた。「驚いたな、」僕はさう言つた。「あなたのしてることはそれは男のすることですよ。僕があなたにすることですよ、」「さうよ。」女はまだいま鍵を下した扉のところに起つて肩で呼吸をしてゐた。「今日はそれをあたしがするのよ、こんな場合に男がすることをあたしがするんだわ、」女の眼は何か敵意のある光りで燃えてゐるやうなのだ。ちよつとの間僕の立ちすくんでゐるひまに女はベッドの側に近づいて、着てゐたうすい紅色の着物をぬぎはじめた。帶をとると、するりと着物が床におちる。一絲も纏はぬ裸體は、びつくりするほど艶かしかつた。着物を着てゐるときの女を見てゐては夢にも想像の出來ない、その白い肌の柔かさは手を觸れたらそのままつはりついて離れないのではあるまいかと思はれるほどだつた。恐らく女はこのことを充分に知つてゐるのであらう。そして恐らく着物を脱いだ彼女はどんな男の心をもとらへることが出來るに違ひないと言ふことを。僕は半ば呆然として、ふいに燃え上つて來る喰べ物を見せられたときの動物のやうな自分の心と闘つた。不思議なことであるが、これに似たほかのどんな場合にでも畫家である僕の本能は女の美しい肉體をそのまま自分のものにしたいと思つたことはなかつた。それだのに、この女の體はほかのどんな欲望も自制も押し殺して了ふほど僕の心を壓倒した。不覺にも僕はこのとき、いつか女が話したことのある女とその家庭教師との戀を妄想したのだつた。「何をぼんやりしてるの？あなたはそんな意氣地なしなの？」女の聲が鞭のやうに僕の頬を打つた。僕は息をのんでゐた。何と言ふことを言ふのだ。かういふことを言はれた男が何をするか、この女は知つてゐるのだらうか、と思はず僕は荒い氣持になつて女の體を抱き上げると、ベッドの上へ叩きつけるやうにして轉がした。ぐさつと音がしたやうだつた。女は肩で息をし乍ら眼を大きく瞠いたまま、さあ、どうするのよ、とでも言ふやうにぢつと僕を見詰めてゐた。僕はもう獸になつてゐた。片手をふいに女の胴に廻すと、柔かいその乳房の間に顏を埋めた。あ、と女は短い叫び聲を立てた。僕は動かなかつた。もし僕が聲を立てることが出來たならばこんなことを言ふ積りであつた。「どうするか見てゐろ。夜があけたらもうお前の體はなくなつてゐるだらう。」ふいに女は身悶えして兩手で僕の體を突き上げようとした。そして狂氣のやうになつて僕の腕と言はず胸と言はずところ嫌はず齒を立てた。何といふことだ。さつきまでのあの人を馬鹿にした不良少女の挑戰とこの激しい抵抗とは何を意味するのであらうか。僕は女のなすに任せ乍ら少しも手を離さうとはしなかつた。突然、女が首をがくつと後に落して眼を閉ぢた。見るとその蒼ざめた唇から細い一條の赤い血の線がたれてゐるではないか。「小牧さん、小牧さん、」僕は女の肩をゆすぶり乍ら呼んだ。どれくらゐ時間が經つたのか分らなかつた。カーテンの隙間から白い夜明の光りがさして來た。僕もまた綿のやうに疲れてゐた。そのままそこに突つ伏して、眠りこけて了つたのであつた。眼がさめたのは翌朝のもう午近い時刻であつた。女はまだ死んだやうになつて眠つてゐる。二三度呼んで見たがなかなか眼を醒ましさうにもなかつた。氣がついて見ると僕の着てゐた白シャツはところどころひき裂け、頬にも腕にも爪でかかれた痕があつた。ふいに僕は女が眼をさますのを惧れるやうな氣持を感じて、急いで身支度をしてホテルのそとへ出た。灼けつくやうな七月の太陽の中にかつと毒々しく咲きはびこつてゐる前庭のあぢさゐの花のところまで來ると僕は危ふく眩暈がしてそのまま倒れさうになつた。

○

そのことがあつてから僕はときどき小牧高尾のことを考へてゐることがあつた。また呼出しの手紙をよこすだらうとそれとなく待つ

てゐたが、一日二日と待つても何とも言つて來ない。前にはあんなに一度も缺かさずによこしてゐた手紙が來なくなるといふのは可笑しいけれどもしかし今日は來てるだらうなどと夜更けて家へ歸つて來る途中でも考へるのであつたが歸つて見るとやはり何にも來てはゐなかつた。やがて五六日も經つた或る日のこと、女房が一枚の名刺を持つて二階へ上つて來て、見知らぬ男が僕に逢ひに來てゐると言ふ。黑い詰襟の洋服を着た風體のあまりよくない男が玄關に坐つてゐる。僕の顏を見るとすぐに、「ちよつと小牧さんのお嬢さんにお目にかかりたいですが、」と言ふのである。そんな女はここには來てゐないと言ふと、いやほんのちよつとお目にかかるだけで好いんですとまるで僕が女の來てゐるのを隱してでもゐるやうなことを言ふ。「一體君は僕とそのお嬢さんと何か關り合ひでもあるといふのかね？」男はちよつと頰にうす笑ひを浮べた。そして大きな紙入のやうなものの中からもう一枚の大型の名刺をぬき出して僕の前へおいた。東邦祕密探偵社何某と書いてある。「實はこちらへ伺ふ前に御近所でもちよつと聽いて來たんですし、私も一二度お嬢さんがそのさきの停留場に立つておいでのところをお見受けしたこともあるのです。」と下手な鎌をかけたりする。「そんなら家の中を探して見て貰つても好いが、しかしここには僕と女房と子供がゐるだけですよ。」もしほんたうにあの女が來てゐるとしても僕は平氣でかう言へる。こんな男の言ふことなどはどうでも宜かつたが、またあの女が何をしでかしたのであらうとそれが知りたかつたので、「だが、そのお嬢さんといふのは家出をしたのですね。」と訊くと、何を白つぱくれるのかといふ積りであらう胡散くささうな顏つきで、「一週間くらゐ前にね。しかし湯淺さん、あなたはあの晩、望海ホテルへ御一緒にいらしてからどうだつたのです？」「望海ホテル？」僕は平氣でとぼけた。「そんなところへ行つたことになつてるんですね、何だつてまた僕が行つたことになるんです？」男の言ふところによると、女のゐなくなつたあとその部屋を調べて見ると、僕の寫眞の切り拔が床に落ちてゐた。女中の證言によつて女が男のつれと一緒に車にのつて出かけたといふことが分つたから、車を調べてその運轉手に僕の寫眞を見せると、確かにこの方だと言ふし、それからホテルへ行つてボーイに訊いて見てもこの方に違ひないと言ふ。「ちやんと種が上つてなきやなかなか斯うやつては來られませんからね。」「不愉快な口の利き方をするね、君は。種とは何だい？」僕はわざと大きな聲をして言つた。「何の權利があつて君はそんな刑事のやうな口の利き方をするんだ。そんな訊問に僕は一言も答へる義務はないよ。そりやあの女は一べんここへ訪ねて來たことくらゐあるけれど、」さう言つてゐる間に僕はほんたうに腹を立ててゐるやうな氣になつたのだ。男はしばらく考へ込んでゐる風であつたが、僕の語氣の荒さにけおされたのかそれとも僕の言ふことをそのままほんたうだと思つたのか、ではやはり自分の見込み違ひであつたかな、と言つてやがて歸つて行つた。

あの女が家出をした。恐らくあの朝ホテルから家へ歸らずにそのままどこかへ行つて了つたものと思はれるが、それについて僕に幾何の責任があるとしても僕は平氣だつた。汽車の中でちよつと男を見たからと言つてすぐその男に近づいて來る、そんな風な女の場合だ。どんな突飛な行動も悲劇的な結果を伴ひはすまいと思はれたので、僕は多寡をくくつたのだ。翌日、僕はひとりでヴァイオリンか何かの演奏を聽きに帝劇へ出かけて行つた。廊下へ出て煙草を吸つてゐると、若い令嬢風の女が二人僕に近づいて、「失禮ですけれど湯淺さんではいらつしやいません？」といふ。二人とも小牧高尾の友だちだが、彼女のことについてちよつと話したいことがあるから、差支へなかつたら階上の喫茶店まで來てくれないかと言ふのだ。一人はそれほどでもなかつたが、もう一人の女のいま咲いたばかりの花のやうな生々とした美しさは僕の眼を囚へずにはおかなかつた。それは僕が日本へ歸つてから始めて見る美しさで街の女たちの決して持つてゐない淸々しさがその言葉にも表情にも溢れてゐ

た。この女があの西條つゆ子なのだ。僕といふ男の一生を支配し、僕の運命をくつがへした、あのつゆ子なのだ。僕はもう決して小牧高尾のことについて昨日の朝あの祕密探偵の男に訊かれたときのやうにむきになつて否みはしなかつた。それどころか、彼女らと一緒になつて高尾の行方を探してくれないかと言はれたときもすすんでその仲間に加はらうと答へたほどであつた。「お母さまがお氣の毒なんですの、」つゆ子はさう言つた。ちやうどあの晩やはり同じやうにどこかへ出かけてゐたといふ高尾の母は、その良人の留守中にこのやうな不始末があつたと分つたなら生きてはゐられないと言つて騒いでゐるとのことであつたが、僕はしかしそれについては少しの同感もしなかつた。僕の心は新しい興奮で一ぱいだつたのだ。こんな美しい女たちと一緒になつて女の行方を探すといふことは何といふ愉快なことか分らない。さう思つた僕は何か僕に用事のあるときは電報をくれるやうにと言ひおいて彼女らと別れた。三日ほど經つたある晩つゆ子から電報が來て、明日の朝の六時に東京驛へ來てくれといふ。六時といふと夜があけて間もない頃ではないか。僕は殆んど眠らぬくらゐにして早く眼を醒し、東京驛へ馳けつけた。つゆ子はもう來てひとりで改札口のところに立つてゐたが僕の姿を見ると高く手をあげて二枚の青い切符を示した。「たうとう探偵が始りましたわ。」つゆ子はどんどんフォームの方へ歩き出し乍ら言つた。彼女の細い肩はぢきに僕の肩とすれすれくらゐの高さだつた。「居所が分つたんですか?」「えゝ。」つゆ子は黒い眼をちらりと流して僕の方を見た。「昨夜お母さまから電話がありましたの。逗子のホテルにゐるんですつて、」さういふ通知が探偵社から來たのだが、迎へに行くとしてもこの場合探偵社の男やそれから母親などが行つたのでは恐らくあの女の氣持を昂らせるばかりであらう、却つて何も彼も話し合つてゐる間柄の仲の好い友だちであるつゆ子が行つてくれるならばと言ふことになつたのださうな。まだ早い汽車の中はすいてゐた。「僕まだ何も喰べてないんですよ。」僕はパンとコーヒーとで輕い食事をとりながら、この愉快な旅行が、あの女の行方を捜索するためだとは信じることが出來なかつた。涼しい朝の風が汽車の窓を掠める。つゆ子は快活な調子で話しかけた。「あなたのこと、もうずつとせんからお知合ひになつてるやうな氣がしますわ、たいへんな評判だつたんですもの。小牧さんたら、會ふたびに話すのでは足りないで電話かけてよこしたりしてあなたのお噂なさるんですのよ。」「あの女のやりさうなことですね、」すつかりつゆ子に囚はれて了つてゐた僕は、あの女のことでつゆ子から詰らぬ誤解をうけたくないと思つたので、ここであの女との關係をはつきり説明して置きたかつたのだ。「風變りなお孃さんといふ印象以外には何にもうけとりはしなかつたんです。ほんたうですよ。」「隨分ね、ではこんなお役目、ご迷惑ぢやありませんこと?」「あなたと御一緒でなかつたらね。」つゆ子の意を得るためには僕は何でも言つたことだらう。やがて汽車は着いて僕らは自動車でホテルへ向つた。

ホテルの帳場ではなかなか埒があかなかつた。宿泊人名簿に小牧高尾の名の見えないのは勿論僞名で投宿したのだらうと思はれたが、それについて彼女の風貌の特長を細かに説明して見ても事務員は容易に、「ああ、あの方ですか、」とは言はなかつた。若い婦人の滯在客は六七人もあつて果してどの婦人がその小牧さんなのか分らぬと言ふのだ。僕らはちよつと困つた。「砂濱の方へ出てませう。いまに運動に出て來るかも分らない。」僕らは露臺の側をぬけて海に面した廣い芝生の方へ出た。「あそこにいらつしやるわ。」つゆ子は立留つて言つた。西洋人の子供らを相手にきやつきやつと聲を立ててボール投げをしてゐるのだ。ワンピースの短い洋服を着て髪をお下げにしてゐる彼女はまるで子供のやうなのだ。僕らはちよつとの間呆氣にとられて立つてゐた。これが行方不明になつたといふ彼女なのだ。しかし考へやうによつては如何にも彼女らしくもある。「駄目よオ、そんな球、」犬ころのやうに球を追つて驅けて來た彈み

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com